

『大燈百二十則』から『宗門葛藤集』へ

——中世から近世初頭の臨済禅における公案集の形成について——

安 藤 嘉 則

From “Daitō-hyakunijussoku” to “Shūmon-kattōshū”
——On the formation of Kōan-shū in the Rinzai-zen——

Yoshinori ANDO

一、はじめに

今日臨済禅において公案参究の必須のテキストの一つに『宗門葛藤集』という公案集がある。これは『碧巖録』・『無門関』といった中国で成立した公案集とは異なり、日本の臨済宗の禅林で成立した二八二則の公案から成る典籍である。この『宗門葛藤集』は江戸期から明治期にかけて幾たびか版行されているが、特に大正五年に藤田玄路（徳次郎）居士によって、『塗毒鼓』の中に『無門関』・『臨済録』・『雪竇頌古』・『虚堂録代別』などとともに編集収録されて袖珍本となり、参禅者が参究すべき公案集として今日に至っている。

しかしながら本書は『碧巖録』・『無門関』よりも後代の成立で、し

かも日本において成立した文献であるにもかかわらず、その成立年代や編集者の名前もまったく不明のままである。本書の刊本の初刻が元禄二年（一六八九）であるので、白隠慧鶴（一六八五—一七六八）以前の公案禅のテキストであることがわかるが、はたしてその公案の枠組みがどこまで遡りうるのだろうか。現在の室内においてもこれが参究されているだけに、問題となるところである。

ところで禅門において「宗門葛藤集」と称する文献は、大きく二種類に分けられる。すなわち一つはこの二八二則の公案集としての「宗門葛藤集」であるが、一方において「宗門葛藤集」という題目が付されている文献として、いわゆる「禅林句集」なる文献を指し示すこと

もある。これは禅林で著語などに用いられる言句を集成したもので、元来妙心寺一三世で関山慧玄下七世の東陽英朝（一五二二年寂）によって編集されたものを礎とするものの、中世末から近世にかけて実に多様な種類の刊本・写本が成立しており、これらの書誌的な研究は川瀬一馬博士によって「句雙紙考」（『積翠先生華甲壽記念論纂』〔昭和十七年〕に所収）に詳しく、文献的整理作業がなされている。またこの川瀬博士の説をふまえて『新纂禅籍目録』（昭和三十七年）では、第二類を次のaからeの五種類に諸文献を分類整理している。⁽²⁾ いずれにしてもこれらの文献では写本によって「句雙紙」・「宗門方語」・「禅林集句」などとも題されるのであるが、中には「宗門葛藤集」と題される場合も見受けられるのである。今日においてもこの『禅林句集』は公案参究の場において必須の書籍となっており、参禅者はこの句集を依用しながら公案に対する著語を求めていくのである。このように禅林において二つの「宗門葛藤集」がみられたのであるが、本稿ではあくまで公案集としての「宗門葛藤集」についてのみ扱うことにし、中世末から近世初頭における臨済禅について考える一助としたい。

二、『大燈百二十則』と密参録文献・『宗門葛藤集』

ところでこうした日本の臨済禅で成立した公案集『宗門葛藤集』を考える上で、その一つの起点となるのが、『大燈百二十則』なる公案集である。本書は大徳寺開山大燈国師宗峰妙超（一二八二—一三三七）によって成ったとされる文献であるが、永正一六年（一五一九）の積翠軒旧蔵の写本等によって、今日に伝えられている。大燈国師のその門下

に徹翁義亨（徹翁派〔大徳寺派〕の祖）、関山慧玄（関山派〔妙心寺派〕の祖）を出しており、中世末に至ると五山派を駆逐する形で急速に伸張させており、今日の臨済禅の流れ（いわゆる「応燈関」）を形成するに至る。こうした臨済宗史の上から見ても、この『大燈百二十則』はこれらの山隣（妙心寺派や大徳寺派）の禅の基盤となった大燈国師の公案禅を窺う資料として意義深い資料である。

大燈国師の後、中世末から近世初期の山隣の臨済禅は口訣を秘密伝授する密参禅が流行し、その影響下で成立した密参録がこの妙心寺・大徳寺両派において数多く成立している。大徳寺派では百五十則、碧巖類則、雲門百則、雑古則などの公案の枠組みが形成され、一方妙心寺派では『碧巖録』を中心に「碧前碧後」の古則の枠組みが形成されている。この両派の密参録文献については北鎌倉松ヶ岡文庫蔵の資料を中心に拙稿において分類整理してみたのであるが、中世末から近世初頭において成立しているこれらの密参録文献においても『大燈百二十則』の影響を窺い知ることができる。特に大徳寺派の公案体系を示した公案目録（松ヶ岡文庫蔵、ハ・一〇七〇）では『大燈百二十則』の公案群も見られ、その密参請益（同文庫蔵、ハ・一〇五〇・二一四）も残されている。筆者は『大燈百二十則』は、これらの密参録文献に影響を与えながら、結果的にこれらの密参録文献を通じて、密参録群と成立時期を密接している『宗門葛藤集』の公案の選定にも影響を与えていると考えている。

そこで本稿ではこの『大燈百二十則』を起点とし、『宗門葛藤集』をその帰着点とする作業仮説を設け、起点から後の密参録文献を見てい

く方向と、帰着点の『宗門葛藤集』からその前提になった『大燈百二十則』や諸密参録を見ていくという視点から二つの対照表を作製して、中世臨済宗において成立した公案集のその体系について考えてみたい。

そこでまず最初に『大燈百二十則』と大徳寺派・妙心寺派の密参録文献、そして『宗門葛藤集』における古則対照表を作成し考察してみたい。この表は『大燈百二十則』で扱われている古則を、『碧巖録』・『臨済録』・『無門関』といった中国撰述の公案集、大徳寺派の百五十

則・碧巖類則・雲門百則（以上は前出のハ・一〇七〇の写本による）・雑古則の密参録（松ヶ岡文庫蔵ハ・一〇六二）の諸写本、妙心寺派の「碧前碧後」の諸写本、そして『宗門葛藤集』二八二則とを対照して表を作製した。△は類似の古則であることを意味する。なお、「碧前碧後」については九種の写本（松ヶ岡文庫蔵七本・真田宝物館松代文庫蔵一本、駒澤大学蔵本一本、西教寺「大津市坂本」蔵本）を別稿にてA類とB類に分類整理しているので、⁽³⁾それを参考にしたい。

【対照表Ⅰ】

大燈百二十則		公案集（中国撰述）		大徳寺派密参録				妙心寺派密参			
1牛過窓櫺	百二十則（ハ1020）	碧巖録	臨濟録	無門関	百五十則	雑古則	碧類	雲門	碧前碧後A	碧前碧後B	葛藤集
2翠岩眉毛	1牛過窓櫺	8		38	前21	甲8			前15		16
3死人無数	2翠岩眉毛				前71			90		後9	×
4香巖上樹	3雲門死人無数			5	前41	甲13		46	前21		22
5乾峰法身	4香巖樹上				前91				前18	前45	19
6狗子無仏性	5乾峯三種病			△1	前18／19				前16	前44	17
7有句無句	6趙州狗子佛性無				前81				前48	前31	49
8好雪片々	7滄山有句無句	42本評							前34	前42	35
9万法不侶	8龐老好雪片々				前2	甲2			前24	前30	×
10不見一法	9馬祖万法										25
11会如来禪	10玄沙不見一法										166
12靈雲桃花	11香巖祖師禪				前36	甲4			前7	前37	×
13黄檗後剣	12靈雲桃花	66									8
14頼備不知	13岩頭黄檗										×
15金牛喫飯	14長髭朗問訊	74									×
16一物不将来	15金牛飯桶				前27				前5	前6	6
	16趙州放下着										

43 良遂參麻谷	42 堂僧看經	41 拈華微笑	40 陞座白槌	39 寒山茄串	38 出不出話	37 百丈再參	36 是凡是聖	35 虛堂拄杖	34 庭前栢樹	33 黃昏脫襪	32 撥退果卓	31 萬頃荒田	30 龍不見拄	29 水牯牛話	28 伝語德山	27 孤峯出身	26 論劫在途	25 定擒欽山	24 赤肉团話	23 黃檗打臨濟	22 火焰轉法輪	21 兜率三関	20 黃龍三関	19 松源三轉語	18 湖南報慈	17 至道無難
43 良遂參麻谷	42 王常侍訪臨濟	41 世尊拈華	40 世尊陞座	49 寒山茄串	38 三聖我逢人	37 馬祖因百丈再參	36 岩頭德山凡聖	35 虛堂拄杖	34 趙州栢樹子	33 舜老更黃昏	32 洞山冬夜菓子	31 香林万頭荒田	30 臨濟是柱	29 南泉昨夜三更	28 臨濟傳語徑山	27 臨濟孤峯頂上	26 臨濟家舍途中	25 岩頭欽山非無位	24 臨濟赤團肉	23 黃檗六十棒	22 雪峯火焰上	21 兜率三轉語	20 黃龍三関	19 松源三轉語	18 雲門洞山三頓棒	17 趙州至道
			92																						58	
	勘弁 12														勘弁 11	上堂 7	上堂 8		上堂 3							
		6						△ 37													47	附 則	△ 20	15		
		前 49				後 40		前 1											前 97	前 43	前 98	前 33	前 53	前 66		
		甲 17						甲 1																		
																		32						15		
		後 8				後 53		前 57	前 8										後 47			前 6	前 9	後 14	後 59	
		後 63				後 64		前 31	前 26										後 54		前 36	前 10	後 47	後 70		
△ 175	×	143	×	×	×	190	×	194	9	×	274	×	×	98	×	88	×	×	184	△ 130	×	7	10	150	×	×

71 劉磨到鴻山	70 清淨行者	69 女子出定	68 馬祖日面月面	67 梁武達磨	66 趙州草鞋	65 南泉猫兒	64 俱胝一指	63 雪竇云二老宿	62 円明云大小德山	61 法眼拈云	60 德山小參不答話	59 肅宗問忠	58 香林坐久	57 德山托鉢	56 法眼惠超	55 僧問趙州四門	54 雪竇二龍	53 楊岐示衆	52 洞山寒暑到來	51 南泉住庵時	50 藥山久不上堂	49 法燈示衆	48 趙州因僧問	47 六祖因僧問	46 雪竇示衆	45 楊岐問慈明	44 丹霞燒仏
66 劉鉄磨老孥	65 清淨行者	64 文殊女子定	63 馬祖日面	62 梁武廓然		61 南泉猫兒	60 俱胝一指				59 德山不答話	58 忠國師無縫	57 香林坐久	56 德山托鉢	55 法眼惠超	54 趙州四門		53 楊岐薄福	52 洞山寒暑	51 南泉住庵時	50 藥山久不陞座	49 法燈示衆	48 趙州洗鉢孟	47 六祖因僧問	46 雪豆示衆	45 楊岐幽鳥	44 丹霞木佛
24			3	1	64	63	19					18	17		7	9											
		42					3							13									7				
	前 92	前 55					後 24							後 30									前 39				前 15
			甲 9																								
	前 25	前 55												前 22													前 46
	前 96	前 95					後 105							前 40						後 44			後 76				後 12
×	26	56		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	23	×	×	×	×	×	153	×	×	×	×	×	191	47

97 倒一節	96 雲門對一說	95 法眼丙丁童子	94 禾粟豆	93 僧問慈明	92 雪峰輓毯	91 子胡狗	90 趙州三轉語	89 雲門屎橛	88 洞山麻三斤	87 雲門塵々三昧	86 慈明一畝三蛇	85 花藥欄	84 筓籬木杓		83 那吒折骨	82 雲門露	81 雲門普	80 趙州蘿蔔	79 南泉參涅槃	78 雲門體露	77 蓮華柱杖	76 龍華翠微	75 雪峰鼉鼻蛇	74 保福遊山	73 智門蓮華	72 僧問百丈
92 雲門倒一說	91 雲門對一說	90 法眼丙丁童子	89 古德三寶	88 慈明蓮花棒是	87 雪峰輓毯	86 子胡狗	85 趙州三轉語	84 雲門乾屎橛	83 洞山麻三斤	82 雲門塵々三昧		81 花藥欄	80 古德有漏	79 慈明三蛇九鼠	78 那吒太子本身	77 雲門露	76 雲門正法眼	75 趙州蘿蔔	74 南泉不說底法	73 雲門對露	72 蓮花柱杖	71 龍牙禪板	70 雪峰鼉鼻	69 保福妙峯頂	68 智門蓮華	67 百丈奇特
15	14						96		12	50		39						30	28	27	25	20	22	23	21	26
								20	18																	
								前 96							前 37	前 44	前 74	後 4								
1	1	7			4	2										6	7									
								96								21	5									
								前 20								前 31										
								前 3								前 22										
×	×	×	×	×	×	×	×	21	70	×	×	×	×	×	261	32	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

[illegible]

この表によって確認されるのは、まず『大燈百二十則』と『碧巖録』との関係である。すなわち『大燈百二十則』は碧巖百則の中、三十四則を含んでおり、古則選定において『碧巖録』が大きな位置を占めていることが理解される。この事實は特に大燈国師によって「碧巖百則下語」⁽³⁾が示されていることも関連するであろう。特に大徳寺派の碧巖録抄や密参録では、この大燈国師の下語は權威ある見解としてしばしば引用されている。また碧巖百則では、とりわけ「翠巖眉毛」は大燈国師自身の契悟にかかわる重要な公案であり、この『大燈百二十則』に第二則として用いられていることも注目すべき点である。

また『大燈百二十則』で扱われている『碧巖録』の公案について注意されるのが、「碧前碧後」・「百五十則」という大徳寺派・妙心寺派の密参録との問題である。すなわち『大燈百二十則』の中「碧前碧後」密参録で扱われる公案が三一例(A類の用件数、B類では三三例)見出されるのであるが、これらには『碧巖録』と重複する公案が一則もない。一方「百五十則」密参録では『大燈百二十則』の中、四〇例が用いられているが、この中四例ほどが『碧巖録』と重複している。ただこの大徳寺派・妙心寺派の密参録にはそれぞれ別に「碧巖密参録」が成立しており、基本的にはこの両派の密参録では『碧巖録』とは重複しないといえるであろう。例えば大徳寺派「百五十則」密参録で『碧巖録』と重複する第七一則「翠巖夏末」の場合、「見于碧岩第八則」(『大寺禅室内秘書 別本丙』六八頁)とあつて密参の内容を記していないような例も見られる。

次にこの『大燈百二十則』では『無門関』の公案が一七例ほど用い

られている。そして、これらの『大燈百二十則』に引用された『無門関』の古則は、大徳寺派・妙心寺派の密参録文獻においてそのほとんどが用いられていることも注目される。例えば『無門関』の一七例の中、「碧前碧後」では、そのすべてが依用され、「百五十則」の場合は一五例ほどが用いられている。先の『碧巖録』の場合、「碧前碧後」・「百五十則」の密参録との重複が避けられて選定されていたのであるが、逆に『無門関』の場合は重複するのを避ける配慮はなかったといえるであろう。

また『宗門葛藤集』についてであるが、この表によって『大燈百二十則』の公案の中、四三則が『宗門葛藤集』に取り入れられていることが知られる。しかもこれらの公案はやはり「碧前碧後」や「百五十則」の密参録と関わりが深いと考えられ、特に四一例中、三一例が重複する「碧前碧後」との関係が密接であり、これは以下に検討するところである。

三、『宗門葛藤集』の成立

次に『宗門葛藤集』の成立について以下に検討したい。まず『宗門葛藤集』の版本の開版についてまとめてみると左記のごとくである。

刊本

(1)二卷二冊、元禄二年(二六八九)刊、大和屋重左衛門、国会図書館

(2)二卷一冊、安政五年(一八五八)刊、京都柳枝軒、駒澤大学
(3)二卷一冊、安政六年(一八五九)刊、丹波屋榮助、内閣文庫

- (4) 二卷一冊、天野宗男編、明治一九年(一八八六)刊、名古屋矢野平兵衛^(*)
- (5) 首書本、雲崎智道編、一冊、明治三三年(一八九〇)刊、京都出雲寺文次郎
- (6) 和訓畧解本、雲崎智道編、島田春浦校、大正三年(一九一四)刊、東京光融館、宝鏡三昧講釈、正偏五位要解を付す。
- (7) 塗毒鼓(二冊)の正編に所収、藤田徳次郎(玄路)編、大正五年(一九一六)、京都貝葉書院刊
- (8) 塗毒鼓(二冊)の正編に所収、藤田徳次郎(玄路)編、昭和二年(一九五〇)、京都建仁寺僧堂、(昭和三年に再刊)
- (9) 梶谷宗忍訳注本、昭和五七年(一九八二)、大通院(京都市相国寺山内町)刊行

【対照表Ⅱ】

宗門葛藤集	大燈百二十則	碧巖録	臨濟録	無門関	大德寺派系密参録	妙心寺派密参録
1 二祖安心				41	百五十則	雜古則
2 六祖衣鉢				23	前14	99
3 五祖他奴				45	前65	前1
4 雲門須彌				31/33	前12	前3
5 馬祖即心				47	前27	前4
6 趙州放下	16				前33	前5
7 兜率三関	21				前36	前6
8 靈雲見桃	12				前1	前7
9 趙州柏樹	34			*37	甲4	前8
10 黄竜三関	20				前53	前9
11 瑞巖主人				12	前90	前10
						前53
						8
						16
						15
						6
						3
						2
						4
						1
						119
						138
						放光頌古

この『宗門葛藤集』の出版状況をみると、近世初期に元禄年間の版行を嚆矢とし、元禄年間から安政年間までの約一七〇年間の空白期間を経て、幕末から明治大正にかけて、次々と刊行されていることがわかる。これは幕末から近代初頭にかけての禅界の隆盛を反映しているものとも考えられるのであるが、いずれにしてもこの二八二則公案集が『宗門葛藤集』として表題されるのは、管見する限りこの元禄刊本が最初である。これ以前の大德寺派・妙心寺派の密参録文献においては「宗門葛藤集」なる公案集を今のところ確認することはできない。そこで以下においてこの『宗門葛藤集』が如何にして成立したのか、その前提として予想される公案集や密参録文献との対照表を以下に示して検討してみたい。

42 漂墮鬼国	41 賢女屍林	40 虚空為紙	39 二僧捲簾	38 関山賊機	37 百丈野狐	36 南泉鎌子	35 懶安有句	34 国師三喚	33 密庵沙盆	32 雲門露字	31 虛堂頌古	30 債女離魂	29 心随万境	28 香巖擊竹	27 石霜竿頭	26 不入涅槃	25 馬祖西江	24 密庵意旨	23 德山托鉢	22 雲門蘇廬	21 雲門屎橛	20 己庵樹上	19 香巖上樹	18 山谷木犀	17 乾峰三種	16 牛過窓櫺	15 孤峰不白	14 長生混沌	13 郎中地獄	12 趙州勘婆
							7			82					70	9		57	3	89		4		5	1		116		120	
										碧6評																				
			26		2			17				35						13		21		5			38					31
					前32		前81	後36	後25	前44		前25		前40	前92	前2		後30		前96		前41		前91	前21	前62	前20	前3	後37	
														甲5								甲13			甲8		甲23	甲3		
前41	前40	前39	前38	前37	前36	前35	前34	前33	前32	前31	前30	前29	前28	前27	前26	前25	前24	前23	前22		前20	前19	前18	前17	前16	前15	前14	前13	前12	前11
		前20			後28		前42	後16	前2	前22	前19	前18	後9	後93	前66	前96	前30	前41	前40	後9	前3	前47	前45	後92	前44	前11	前8	前39	前25	前21
		65			19		48		21	118		62	23	13	55	64	10	52	51	75	103		40		39	61	47	58	5	46
53前	200前	87前	141前	116前	18前		15前		112	240前	45	45前	88前	41前		61前	5前	22前	21前	80前	7前	28前	27前	47前	26前	33前	39前	20前	35前	31前
58	220	9／94	161	6／135前	21前		18前	101前	131	4前		50前	95前	46前	99前	66前	7前	26前	25前	86前	10前	32前	31前	52前	30前		44前	24前	40前	35前
388	387					386				385	384			383						365	382			379				381	380	

73 千尺井中	72 無功德話	71 南堂異類	70 洞山三斤	69 古帆未掛	68 瀉山水牯	67 興化打中	66 首山此經	65 一失人身	64 鼓山伽陀	63 張公喫酒	62 柏樹托鉢	61 馬祖塩醬	60 黃竜念讚	59 大通智勝	58 法華禪定	57 水上行話	56 女子出定	55 古德透徹	54 僧未問仏	53 大慧無字	52 中峰無字	51 狗子之頌	50 仏直祖曲	49 趙州無字	48 谿寐恒一	47 丹霞燒仏	46 達磨不來	45 心身共捨	44 室內一灯	43 秀才造論
			88													69							6		44				110	
碧18評	碧1評		碧12																											
			18											9		42							1							
																前55							前18／19		前15				前73	
												丙18																		
前71	前70	前69		前68	前67	前66	前65	前64	前63	前62	前61	前60	前59	前58	前57	前56	前55	前54	前53	前52	前51	前50	前49	前48	前47	前46	前45	前44	前43	前42
後4					前51	前17					後41	後8				後95							前31		後12		前13	前9		
43					57	87					80	73				68											28			
74前				38前	32前	56前	89前	123前			67前	62前	235前		24前	85前	14	12	10	11	9		8前	108前		127	43前	37前	34前	
80		118		43前	37前	61前	96前	142		100前	72前	67前	256		28前	92	17前	15前	14前	13前	12前	16前	11前	127		146	48前	42前	38前	
		405					404	403	402	401	400			399			396	398	395	394	397	393		392	47	391	390	44	389	

104 讚六祖偈	103 運庵反衣	102 華嚴心喻	101 百丈開田	100 薰風自南	99 雲門三句	98 南泉水拈	97 別峰相見	96 見色明心	95 女子定答	94 願空諸有	93 百草頭話	92 五家評商	91 六祖風幡	90 仰山白槌	89 語默離微	88 臨濟孤峰	87 仏不知有	86 馬祖翫月	85 三仏夜話	84 仰山枕头	83 錯用心話	82 莫妄想話	81 圓悟禪門	80 世尊未說	79 芭蕉拄杖	78 外道六師	77 無鬚鎖子	76 南泉油滋	75 法灯未了	74 大梅梅子
					103	29										27	外													
							碧 23 評																							
																上 堂 7														
													29	25	24										44					
						前 64	前 99					前 61					前 69	後 35												
						丙 30	丙 51										甲 22	丁 21												
																84														
							後 74					後 69							後 68	前 81	前 80	前 79	前 78	前 77	前 76	前 75	前 74	前 73		
							前 48					後 18							後 106										後 97	
							25					107																		
238	237	236	68	167	146	145	106	148		150	215	189	188	187	186	185	155	154	153	152				107 前	126 前			117 前	60 前	
259	258	257	74	147	166	165		168		170	235	209	208	207	206	205	175	174	173	172				126	145			136	65 前	
413		412				356			411	410	409	359									364	408	407					363	406	

135 治生產業	134 孔子一變	133 東西密付	132 世尊蓮目	131 濟下三評	130 黃檗烏藤	129 趙州救火	128 雲門一曲	127 洛浦供養	126 南岳說似	125 百丈不食	124 馮山摘茶	123 南泉失火	122 世尊初生	121 仙性三轉	120 維摩丈室	119 清稅孤貧	118 心不是仙	117 胡子無鬚	116 維摩金粟	115 大燈三問	114 慈明行心	113 路逢死蛇	112 井樓請救	111 平常是道	110 朝聞夕死	109 夾山掘坑	108 袈裟裏鞋	107 夾山境話	106 圓悟投機	105 一子出家
				23																	118									
														碧 84 評												碧 58 評				
																10	34	4					19							
									戌 11	乙 36 庚 40						庚 36 辛 11														
						前 72			後 25	後 76											後 67									
						後 88			後 11	後 19											後 35			後 79						
								18																						
				221	220	212	211	210	131 後	135	208	213	233	163	234	139	138 ／ * 118	137	134	115 後		132	219	140	124	125	158	157	156	
				242	241	232	231	230	150	155	228	233	254	183	255	159	158	157	154	153	152	151	240	160	143	144	178	177	176	
431	430	429	428	427	425	426	424	423	360	421	422	361	420	357	419				418	417	416	353	358		415	414		355	354	

166 虛堂兩字	165 法身喫飯	164 一言駟馬	163 別有生涯	162 婆子燒庵	161 陳操登樓	160 雲門拈令	159 仰山撲鏡	158 法雲示衆	157 微細流注	156 鐘聲七条	155 慈明盆水	154 慈明榜字	153 南泉住庵	152 大灯三轉	151 虛堂三問	150 松源三轉	149 仏境魔境	148 兜率荔支	147 南岳磨磚	146 乾峰一路	145 広慧罪業	144 迦葉刹竿	143 世尊拈華	142 首山竹篋	141 填王思仏	140 疎山寿塔	139 麻谷手巾	138 興化罰錢	137 洞山地神	136 德山燒疏
											109	51	外		19						115	41								
			碧 20 評		碧 33 評																									
										16					20				48		22	6	43							28
										前 83										前 34	前 42	前 49	後 1							
														丙 7								甲 17			庚 63					
後 29		後 28	後 27	後 26			後 23	後 22	後 21	後 20	後 19	後 18	後 17	後 16	後 15	後 14	後 13		後 12	後 11	後 10	後 9	後 8	後 7	後 6	後 5	後 4	後 3	後 2	後 1
							後 50	後 100	後 33	後 71	後 42			後 48					後 52	後 15	後 34	後 61	後 63	後 72	後 60	後 39	後 40	後 46	後 85	後 24
							116	79		113	117			26					121		69		29	60		82	77	94	85	86
	113	144	163 後	30 後		162	52 後	69 後	57	84 後	81 後			152	70 後	42 後	128		63 後	44 後	79 後	90 後	77 後	76 後	72 後	51 後	65 後	75 後	105	
	132	164	129	34 後		182	57		62 後	91	87	102		128	75	47 前	147	63 後	68	49 後	85	97	83 ／ 262	82	77	56	70 後	81	124	104
451	449	448		348		447	446	445	352			444	443	442			441	440		439	436		435	434			433		432	

197 慈明論棒	196 洞山三頓	195 臨濟築拳	194 虛堂拄杖	193 南院碎啄	192 興化一画	191 慈明連喝	190 百丈再參	189 四賓主話	188 濟賓主句	187 一喝商量	186 臨濟四喝	185 臨濟四境	184 臨濟赤肉	183 維摩本有	182 慈明脫履	181 慈明虎声	180 慈明執爨	179 末後評頌	178 仏教祖意	177 大灯鉄話	176 皓月償債	175 麻谷鋤草	174 巖頭渡子	173 殃嶺產難	172 雲門失通	171 昆婆尸偈	170 曹山大海	169 洞山夏末	168 華嚴法界	167 臨濟三句	
		35			45	37	100					24									43										
	碧12 頌評	碧11 評		碧16 評			碧11 評																	碧6 評							
		行録						示衆10	上堂4	序	示衆21	示衆7	上堂3																	上堂9	
	15																13 評頌														
									後14				前97	前29																	
				丁25												巳2															
後60	後59	後58	後57	後56	後55	後54	後53	後52	後51	後50	後49		後47	後46	後45	後44	後43	後42	後41	後40	後39	後38	後33	後36	後35	後34	後33	後32	後31	後30	
	後70		後31	後56	後65	後67	後64						前49	後14	前50	後45												後99			
			81	78	131	122	126		125	123		133	63		67	33													53		
50後	49後		71後	91後	83後	55後	59後		94後	96後			46後	73後	54後	82後				19後	25後		115	111	171	40後	78後	102後	121／159		
55	54	53	76	105	89	60	64	112	109	107	111		108	51後	*79	59	88			22			134	130	133	45後	84	115	140／179		
367				458	368								370	369	373	372		371	457	350	375	377	378	456	455	454	453	452			

198 州勘庵主	199 瑯耶先照	200 臨濟栽松	201 百丈歸去	202 百丈說了	203 德山行棒	204 臨濟瞎驢	205 張拙看經	206 南方一棒	207 文殊來參	208 一拳拳倒	209 雪峰打僧	210 善財採藥	211 投子答佻	212 雲門喚遠	213 楞嚴輶物	214 守廓跋鼈	215 長沙翫月	216 臨濟洗脚	217 松源上堂	218 臨濟四科	219 陸亘笑哭	220 臨濟四用	221 乾峰拳一	222 文殊起見	223 徹翁遺誠	224 無辺刹境	225 樂天問法	226 浮盃答婆	227 色即是空	228 臨濟教化
																			99											
				碧 28		臨碧 49 評	碧 36 評						碧 79 頌評							碧 12 頌評	碧 26 評									
		行錄 2															勘弁 18		示衆 1		示衆 2									
11																														
																												後 43		
																								丙 2		壬 50				
後 61	後 62	後 63	後 64		後 65	後 66								後 70			後 83													
														後 68			後 104													
216																			95 後	193	195	196	197	172		175	176	177	178	
98	236			137	137														110	213	215	216	217	192		195	196	197	198	
459	237					460		366	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472		473	474	475		476	477	478		

259 路逢達道																																
	碧 9 評		碧 48 評																													
36																																
																									前 68							
																												前 76				
																												後 89				
																												114				
190	191			171	170	169	168	167	166	165	164	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222			184	182	66 前	181	180	179		
210	211			191	190	189	188	187	186	185	184	253	252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	205		204	202	71 前	201	200	199		
							499	497	496	495	494	351	349	492	491	490	489	488	487	486	485	484	483	482	481	480		479				

[illegible]

*本対照表の中、百五十則 碧巖類則については松ヶ岡文庫蔵、ハ・一〇七〇の「大徳寺派密参録目録」の写本、雅古則については松ヶ岡文庫蔵、ハ・一〇七二の「雅古則目録」の写本、碧削碧後のA類は駒澤大学蔵の一四九・一五の写本、B類は松ヶ岡文庫蔵のクハ・八八四の写本にそれぞれ基づいて作製した。また松代文庫蔵本の公案番号の下に付された「前」と「後」は、各本則の頭注に付された碧削と碧後の区分を示している。なお「放光頌古」は放光窟蔵の敬宗老師に付した*は類似の古則であるが、「宗門葛藤集」に対する拈提頌が示されていることから、近代のものにもかかわらず、参考として提示した。また古則番号に付した*は類似の古則であることを示す。

この『宗門葛藤集』の公案の枠組みを見るに、まず従来の中国で成立した『碧巖録』・『無門関』等の公案集との関連性について確認することが必要であろう。この二八二則の公案数はこれまでの百則頌古を骨格として成立した『碧巖録』・『従容録』などや『無門関』の四十八則と較べて、非常に多い数であるが、対照表で示すように碧巖百則とは基本的には重複していない（ただし一則の例外（「洞山麻三斤」・「百丈説了」）がある）。これは当時の臨済宗禅林において『碧巖録』を中心にして室内で参究されていたことが知られるのであり、『宗門葛藤集』は『碧巖録』以外の公案を集大成した文献であると考えられる。これはすでに見た『大燈百二十則』が『碧巖録』を三四則も取り入れていたのと対照的である。一方『無門関』については、その四八則中、約四〇則が『宗門葛藤集』で扱われており、その重複は考慮されていない。すなわち『宗門葛藤集』が成立する頃の臨済禅における『無門関』は、『碧巖録』中心の体系にあつて重要な位置は与えられていなかったといえるであろう。事実、中世臨済宗の密参録文献において『無門関密参録』なる写本、あるいは『無門関』に対する抄物文献は、少なくとも妙心寺派・大徳寺派では極めて稀である¹⁾。

次に『宗門葛藤集』の成立を考える上で、もつとも重要な位置を占めるのが、妙心寺派系の「碧前碧後」密参録である。「碧前碧後」は、『碧巖録』を中心にその前後に公案を配置するものであるが、これには碧前第一則が「本来面目」で始まるA類と「阿誰」で始まるB類とに分類されることを別稿にて指摘した。そして、この対照表において、『宗門葛藤集』と「碧前碧後」の古則群を対照するならば、『宗門葛藤

集』にA類の古則が、ほぼ順番もそのままに組み込まれていることが確認されるであろう。

このA類とB類という相違は妙心寺派四派（東海派「悟谿宗頓下」・聖沢派「東陽英朝下」・靈雲派「特芳禅傑下」・龍泉派「景川宗隆下」）の各室内において築き上げられてきた伝統にもとづいていると推察される。今この「碧前碧後」の各派との関連については別稿に詳述するが、A類の中で四派の影響を認めることができる松ヶ岡文庫蔵ハ・一五〇・二の碧前碧後の写本は、東海派で獨秀乾才下の快川紹喜・天桂玄長等の語がみえることから東海派の影響下において成立したと考えられ、一方B類の中では松ヶ岡文庫蔵の①クハ・八八四・一一、②ハ・一一五〇・一、③クハ・八九二・八九三、④クハ・八八一の碧前碧後の写本では靈雲派の大休宗休や亀年禅愉等を中心に成立した密参録であると考えられる。A類にはハ・一一五〇・二以外にも二本の写本（駒澤大学蔵一四九・一五と松ヶ岡文庫蔵ハ・九五五）が存在するが、やはり、松ヶ岡文庫蔵ハ・一一五〇・二の写本に基づき、A類を東海派の系統によつて成立したと考えられるであろう。したがって『宗門葛藤集』は悟谿下の東海派のA類の「碧前碧後」に見られる公案の配置がそのまま組み込まれていることから、本書が妙心寺派でも東海派の影響下において成立したのではないか、ということが推察される。

ただ『宗門葛藤集』の第八六則から第一三六則、第二〇五則から最終則までは、この「碧前碧後」密参録文献では扱われていない古則がかなり多くみられる。この中第二二三則の「徹翁遺誡」は大徳寺派において見られる古則であり、第二四九則「宏智四偈」や第二五四則「宏

智八句」は曹洞宗の門参文献に見られる古則である。

これらの古則がどのような経緯をもつて『宗門葛藤集』で取り上げられているのか、問題となるであろう。こうした問題も含めて「碧前碧後」密参録から『宗門葛藤集』への展開を考える上で重要な資料が「金屎集」といわれる文献である。そもそも「碧前碧後」として位置づけられる文献中にも「金屎集」という名称が用いられている（例えば駒大一四九・一五の「碧前碧後」密参録の写本の本文冒頭には「金屎」と記されている）。この「金屎集」なる文献について筆者は（1）西教寺（大津市坂本）蔵、『金屎集』、写本、一冊、（2）駒澤大学（二四九・一六）蔵、『金屎集』（題簽）、写本、一冊、（3）真田宝物館松代文庫（長野市）蔵、『碧前碧後』、写本、一冊、の三種の写本を披見しえたのであるが、この中（3）の松代文庫蔵の「碧前碧後」の写本は目録では「碧前」「碧後」として古則名が記されるものの、本文の内容はこれと一致せず、前後の枠組みをはずして公案が収録されており、実質的に「金屎集」として位置づけるべきであるので、ここに取り上げる次第である。

ここで「碧前碧後」と「金屎集」の両文献を比較対照してみると、「碧前碧後」で取り上げられている公案はほぼ「金屎集」に収録されており、「金屎集」なる文献は「碧前碧後」密参録と密接な関係を有していることがわかる。しかしながら両者の相違点は「碧前碧後」があくまで碧巖百則を中心として前後に配置するのを前提とするのに対し、「金屎集」では碧巖の前後という枠組みははずされているということである。また「碧前碧後」では前後あわせて一四〇則から一六〇則程

度の古則数であるのに対し、（2）は二六二則、（3）は二四〇則という古則数であり、これは『宗門葛藤集』の二八二則に近づいた形となっており、また扱われている公案もかなり『宗門葛藤集』に近づいていることが理解される。今古則の枠組みを示すならば左記のごとくである。



ただし本表では「碧前碧後」や「金屎集」で扱われていて『宗門葛藤集』に収録されていない公案（「耽源設齋」等）もいくつか見られるが、本図では大凡の古則の枠組みについてまとめてみた。

さらに、この「金屎集」では初則の公案はいずれも「本来面目」で、二則目から四則目に「東山阿誰話」が配置されており、これはB類「碧前碧後」が一貫して「阿誰話」を初則として「本来面目」を二〇則以降に配置する系統とは異なり、A類「碧前碧後」の伝統にしたがった形となっている。したがってこれらの「金屎集」はA類の「碧前碧後」を成立せしめた東海派の影響下にあることを窺い知ることができる。したがって『宗門葛藤集』の成立はおよそ次のような過程を考えることができるであろう。

『大燈百二十則』↓碧前碧後(A類)↓金屎集↓『宗門葛藤集』

この過程は中世から近世初頭にかけて、『碧巖録』を中心とした公案修行の体系が整備・増広されていく過程であるといってもよいであろう。すなわち『大燈百二十則』は『碧巖録』を取り込んだ公案の集成であり、碧巖の占める比重が大きいのであるが、これが碧巖百則と碧前碧後の体系に分化されて整備されていく。そして碧巖の前後という位置づけが『金屎集』では解消されていき、さらにこれらの碧前碧後・金屎集の伝統を基盤としながら種々の公案を充実させていったのが『宗門葛藤集』であるといえるであろう。『碧前碧後』の系統でしかもA類の伝統をふまえていることから、『宗門葛藤集』の撰述にかかわった僧は妙心寺派でしかも悟谿宗頓下(東海派)の者が大徳寺派や曹洞系の古則をも取り込みながら成立せしめたのではないか、というのが管見する資料を調査した限りでの筆者の現時点での考えである。しかしながら、この『宗門葛藤集』が如何なる人物によっていつ編集されたのかという問題については、依然として不明である。こうした問題について明確な証左となる資料について、筆者は寡聞にして知らない。ただ「碧前碧後A類」↓「金屎集」↓「宗門葛藤集」という成立過程がいつ頃進行していったのかについて、諸文献の成立年代を考慮して幾ばくかの提示をしてみたい。

まず「碧前碧後」密参録の中に引用される妙心寺派の禅僧で、もっとも時代が降る人物としては管見する資料では、東海派では快川紹喜

(妙心寺四三世、一五八二年寂)・天桂玄長であり(いずれも松ヶ岡文庫蔵、ハ・一一五〇・二の密参録にその名が見える)、霊雲派では鉄山宗鈍(妙心寺八〇世、一五三一・一六一七)・千巖宗呂(妙心寺一二二世)である(いずれも松ヶ岡文庫蔵、ハ・八八一の『碧前碧後臨濟録密参』にその名が見える)。「碧前碧後」の密参録文献群はこれら妙心寺派の禅僧の著語や平話を権威として引いていることから一七世紀前半まで「碧前碧後」の体系の中で参究されており、各派において密参録として相伝されていることが知られる。

一方「金屎集」なる文献は西教寺蔵本では奥書に慶安二年(一六四九)八月の記述からみられるものの、松代文庫本や駒澤大学本の「金屎集」の年代は不明である。しかしながらこれらの「金屎集」は本則数や形態から「碧前碧後」をふまえて成立したものと考えられる。ただ、この「金屎集」については曹洞宗の乾国泰舒(一六一七年寂)の代語集(『乾国代』埼玉県行田市清善寺蔵、写本、一冊)に「宗門金屎集」という書名が頭注に明記された上で、そこからの引用として「関山賊機話」に対する代語の拈提がなされているところから、「金屎集」なる文献は一六世紀末までには成立していたと推察される。したがってこれらの文献は「碧前碧後」から「金屎集」といったような明確な時代的な段階的な区分が存在するわけではなく、両者が中世末から近世初頭にかけて並立して存在し、参究されていたといえるであろう。

また「金屎集」といっても二百則以上を数える写本から、西教寺蔵本のように一三八則といった比較的少ない古則数で「碧前碧後」の古則数に近い写本もみられるのであり、「金屎集」の中でも増広過程があ

ったことが予想される。この「金屎集」を基盤として『宗門葛藤集』

が成立したのではないかと考えられるのであるが、この「金屎集」と『宗門葛藤集』と関連性を示すのが松代文庫と駒澤大学所蔵の写本である。

まず松代文庫の写本は冒頭第一丁表に「碧前」とあつて七九則の目録が、次に「碧後」とあつてやはり六五則の公案目録が提示され、続いて公案の本文が列挙されている。ところが本文の方は全くこの目録通りではない。目録の配列を意識したという形跡もなく、碧前と碧後に分けられることもなく、さらには目録以外の古則も多く登場している。つまり本写本では目録と本文は別の公案の体系であるといえるであろう。この点については別稿でも検討したのであるが、目録は「碧前碧後」の伝統を保持しているのに対し、本文は「金屎集」に近い内容となっている。しかしながらこの本文の個々の公案の頭注に「前」や「後」という記載がなされている。これは前の古則に「後」とあつたり、後半の公案に対して「前」とあつたり、まちまちであるが、「金屎集」でありながら「碧前碧後」の公案であることが意識されている。こうした点から、「碧前碧後」から「金屎集」への過渡期の状況がこの松代文庫の写本に現れているといえるであろう。

次に駒澤大学蔵「金屎集」(二四九・二六)の写本は江戸中期の書写で、これも全二六〇則の中、松代文庫の写本と同様に公案によつては「前」「後」が頭注に記されている場合が見られるが、必ずしも全体に涉るものではない。したがって松代文庫本同様、この頭注に「前」「後」とわざわざ記した公案が「碧前碧後」であると認識されていたのであり、これに増広を加えたものがこの「金屎集」であるといえよう。特にこ

の「金屎集」の公案の中、松代文庫本の第一四三則から第二三九則の九六則分は、駒澤大学蔵本の第一六三則から第二六〇則までの九七則分の中から一則分(第二三八則の「南泉一日莊々・」を除いた古則の集合と同じであり、まったく同じ順序で共通の古則が配置されている。実は対照表をみてもわかるように、この両者に共通する九六則分の古則は、その多くが「碧前碧後」の公案の枠組みからはずれており、「前」・「後」の頭注も見られない古則である。つまりこの九六則は「碧前碧後」の枠組みに入らない公案群であり、二種の「金屎集」なる文献は、その核となっている「碧前碧後」の公案の枠組みにこの九六則を加え、さらに若干の調整を加えて配列したものであるであろう。この松代文庫・駒澤大学蔵の「金屎集」の写本を『宗門葛藤集』と対照してみるならば、これらは明らかに『宗門葛藤集』に近づいた内容と形態を有しており、この両写本はへ碧前碧後(A類)↓金屎集↓『宗門葛藤集』という公案集の形成を説明づける資料として重要な意義をもつものであろう。

このようにして『宗門葛藤集』は「金屎集」の伝統をふまえながら成立したのであるが、『宗門葛藤集』にはそれ以前の密参録や「金屎集」などとは異なる特徴がいくつか見出せる。例えばこれまで「碧前碧後」や「金屎集」では後半ないし末尾に配置されていた「達磨安心」が『宗門葛藤集』の初則として配置されている。また『宗門葛藤集』の最終部の二六三則から二八二則までの二〇則分は「碧前碧後」・「金屎集」においてもまったく扱われていない公案が配置されている。したがってこの二〇則は『宗門葛藤集』としての編纂された時点での付加部分

であると考えられる。

こうしてみると臨濟宗の禪林において「宗門葛藤集」なる二八二則の公案集が成立したのは元禄刊本（一六八九）よりも大きく中世まで遡ることはなく近世初頭の成立であると考えることができであろう。

すなわち、少なくとも一七世紀の近世前半まで影響力のあった「碧前碧後」・「金屎集」の伝統をふまえていることから、一七世紀後半の承応の頃から元禄に至る約四〇年の間に『宗門葛藤集』が成立したといえるのではなからうか。

なお、本稿で提示した対照表は完全なものではない。『碧巖録』・『無門関』の古則名と「碧前碧後」や「百五十則密参録」などで表記される古則名は異なっている場合も多く、古則名と古則本文を両方確認して始めて記されるものであり、それには膨大な時間を要するのであり、本表では古則名だけしか把握できないケースもあった。見落としも多々あるであろう。諸賢のご叱正をいただきながら今後完全なものに近づけていきたい。

〈注記〉

（１）正續二冊の中、正編に所収されている。

（２）なお、『新纂禪籍目録』では、「句雙紙」といわれる文献群について川瀬一馬博士の「句雙紙考」（『積翠先生華甲壽記念論纂』）に基づいて

次のような三類を紹介している。

第一類 宗門葛藤集 内題葛藤集 表題宗門葛藤集 内容公案集

第二類 宗門葛藤集 内題宗門葛藤集 表題句雙紙葛藤鈔 内容一字葛藤乃至二十字葛藤に及ぶ

第三類 句雙紙抄

さらに『新纂禪籍目録』では、この川瀬博士をふまえて前出の第二類を次のaからeの五種類に諸文献を分類整理している。

a 内題宗門葛藤集 表題句雙紙葛藤鈔 七卷四冊 内容一字葛藤カラ二十字葛藤ニ及ビ註ヲ附ス

b 内題無 外題句雙紙又ハ註入句雙紙 二卷二冊或一卷 内容一字乃至三字、四言、五言、五言對乃至八言對ニ至ル、一卷本ハ内容別假名註入

c 内外題共禪林句集 無名子戊午跋 二卷二冊或ハ四冊 内容一言至十六言 bト同内容註無 内題句雙紙尋覓、柱禪林集句 表題不明 東陽英朝撰 己十字註内容一字關一三字關、四言乃至八言對 bト同内容

d 新句雙紙（bノ続集） 萬林金屑集韻

e 無著道忠編句集

しかしながらここで『新纂禪籍目録』が紹介している川瀬博士の三類は必ずしもその論考どおりではない。例えば川瀬氏は第一類を「禪林之方語」・「宗門方語」等のいわゆる句雙紙類を当てているであつて「内容 公案集」とするようなものではない。

（３）この両派の密参録文献については次の二つの拙稿において考察した。拙稿「徹翁派の密参録文献について——松ヶ岡文庫蔵資料を中心に——」『松ヶ岡文庫研究年報』第十六号（平成十四年）、「関山派の密参

録文献について『田中良昭博士古稀記念論文集 禅学研究の諸相』(平成十五年二月刊行予定)

(4) 拙稿「関山派の密参録文献について」参照。

(5) 駒澤大学に華叟宗曇(一三五—一四二八)編の『碧巖百則大燈国師下語』の写本(転写本、一四一—一九)が所蔵されている。

(6) なお、『碧前碧後』と『宗門葛藤集』との関連性を指摘した論考に鈴木省訓『『碧前碧後』考』(『天台思想と東アジア文化の研究——塩入両道先生追悼論文集』[平成三年]に所収)がある。この論考は駒澤大学蔵の二種の写本と『宗門葛藤集』とを対照して、『碧前碧後』から『宗門葛藤集』への成立について指摘したものであり、本稿もこの研究成果によるところが大きい。鈴木先生にはこの碧前碧後の問題ばかりでなく、臨済禅に関して多くのご教示をいただいた。先生には改めて感謝申し上げる次第である。

(7) 松ヶ岡文庫に「無門関密参録」が幾種類あるが、これらの多くは幻住派の密参録である。また無門関抄なる文献も幻住派に属するものがほとんどであろう。幻住派にとって『無門関』は一華碩由以来重視されておられ、その独特な公案解釈は別稿に記した。(拙稿「中世臨済宗における幻住派の公案禅」『日本文化研究』(駒沢女子大学日本文化研究所刊)第四号)

(8) 奥書に「江城南泉下僧牧鈍」とあるが、不明である。なお同丁には見せ消ではあるが「南紀江西下僧宗弘」という記述もある。

(※1) 東大史料編纂所に『葛藤集』(猪熊氏旧蔵の写本を影写したもの)

が所蔵されているが、これは室町後期の妙心寺派(一部幻住派を含む)の語録を集成したものである。

(※2) 本書は明治二十四年に名古屋にて「愛知縣下學校用翻刻」として履刻されている。

(※3) 松ヶ岡文庫蔵、ハ・九五五の写本にのみ見られる。